国 際 セ ン タ ー 年 報

第 22 号

平 成 29 （2017）年 度

大 阪 教 育 大 学 グ ロ ー バ ル セ ン タ ー

目　次

第一部　寄　稿

巻頭言……高　橋　　登……1
（グローバルセンター長）

留学生への食生活調査を通した国際理解の教材開発とその実践
―「冷蔵庫の写真から世界の食文化を調べよう！」―‥小　林　　和 美
（教員養成課程　社会教育講座）
飯田　瑞穂・進藤　大典……2
（大学院修士課程社会科教育専攻）

大学予科教育からみた台湾大学の和算書……城　地　　茂……12
（グローバルセンター　国際事業部門）

第二部　国際センター記録

平成 29 年度　国際センター活動報告……17
平成 29 年度　国際センター行事……32

付　記

平成 29 年度　国際センター運営委員会名簿……43
平成 29 年度　留学生宿舎運営会議名簿……43
平成 29 年度　国際交流委員会委員名簿……44
平成 29 年度　私費留学生奨学金等推薦選考会議名簿……44
平成 29 年度　留学生推薦選考会議名簿……45
平成 29 年度　留学生推薦選考会議語学評価委員名簿……45

編集後記……46

巻頭言

高橋　登
グローバルセンター長

国際センターは 2018 年２月にグローバルセンターに改組されました。「国際センター年報」はこれが最終号となり、次号からは装いも新たに「グローバルセンター年報」として再出発します。

センターの前身は、1989 年に発足した留学生指導センターまで遡ることができます。留学生指導センターはその名の通り、増加しつつあった留学生支援を充実させることを主目的とする組織でしたが、その後、2008 年 7 月に国際センターへと改組し、役割を広げてきました。国際センターは国際連携部門と国際事業部門の２部門体制とし、留学生の受入・派遣だけでなく、本学の研究・教育活動の国際化に向け、役割を果たしてきました。

この度発足したグローバルセンターは、本学の国際化をさらに推進するため、I. 研究開発部門、II. 国際連携部門、III. 国際教育部門、IV. 留学生教育部門、V. 語学教育部門の５部門体制とし、教育・研究を整備・充実してまいります。研究開発部門は国際共同研究を推進し、国内諸機関と連携することを通じて、国際的な視点から教育・教員養成の質の向上に資することを目指します。国際連携部門は海外大学との学術交流協定の締結や、国際連携を希望する部局・講座等へのコンサルテーションを行うだけでなく、地域社会の国際化に向け、地域との連携を強化することも任務としています。国際教育部門は学生の海外派遣の促進とそのための条件整備や国際理解教育の充実を通じて、グローバルな視野をもった学生の教育を進めます。留学生教育部門は留学生の日本語教育・学修支援を行なうだけでなく、留学生の受入を促進するための情報発信を積極的に行います。さらに、語学教育部門は、語学教育プログラムの検討、海外語学研修の企画・運営や集中講義等の実施など、本学の語学教育の中核を担うだけでなく、外国語学習支援ルーム（Global Learning Community: GLC）の運営を通じ、学生の自立的な語学学習を支援します。このように、グローバルセンターは、留学生の派遣・受入に留まらず、本学の国際化に向けた総合的なセンターとしての役割を担っています。また、センターの改組に合わせて国際交流委員会も国際委員会に衣替えし、全学的な態勢が整いました。

新センターに求められる広汎な役割を十全に果たすためには、センター専任教員や国際室・国際係の事務職員だけでは力不足です。そのため、２０名を超える先生方に兼任教員をお願いし、各部門でお力を発揮していただくことになっています。附属学校園を含め、本学教職員のみなさまにもご協力いただき、大阪教育大学が真の意味でグローバル化し、世界に開かれた大学となっていくよう、グローバルセンターは努力して参ります。

留学生への食生活調査を通した国際理解の教材開発とその実践
―「冷蔵庫の写真から世界の食文化を調べよう！」―

小林　和美*・飯田　瑞穂**・進藤　大典**
*教員養成課程社会科教育講座・**修士課程社会科教育専攻

１、はじめに

本稿は、2017 年度後期に大阪教育大学大学院教育学研究科の「社会学教育論」（担当教員：串田秀也・小林和美）の授業において実施した留学生への食生活に関するインタビュー調査、およびそれをもとにおこなった小学校第 6 学年社会科の国際理解の授業の考案と模擬授業の実践についての報告である。

2017 年 10 月現在、大阪教育大学では 25 の国と地域から来た 158 人の外国人留学生が学んでいる。彼らの協力を得て国際理解のための教材開発をおこなうことができないかと考え、私たちの生活において身近な存在である「冷蔵庫」に注目し、冷蔵庫を通して見える各国や地域の食文化・食生活の特徴を調べて教材化することにした。まず、14 の国と地域からの留学生 23 人に協力を依頼し、それぞれの出身国および地域の冷蔵庫の写真を収集するとともに、その背景をなす食生活についてのインタビュー調査をおこなった。そして、その結果を分析し、資料集を作成した。つぎに、これをもとに小学校第 6 学年社会科の国際理解の授業を考案し、本学の教員養成課程の学生を対象に模擬授業をおこなった。

２、調査の概要と資料作成

本節では､留学生への食生活調査の概要および調査結果､資料集の作成について述べる。調査および資料集の作成は、受講生の飯田瑞穂、進藤大典、藤井翼がおこなった。

(1)調査の概要

国際センターの古川敦子先生にご協力いただき、日本語・日本文化研修留学生と交換留学生を中心に、それぞれの出身国および地域の冷蔵庫の写真の提供と食生活に関するインタビュー調査に協力してもらえる外国人留学生を募った。幅広い地域についての情報を得るため、14 の国と地域から来た 23 人の留学生を対象に調査を実施した。調査対象者の出身国および地域は、**表 1** の通りである。

表 1　調査対象者の出身国および地域

地域	国・地域名(人数)
アジア	韓国(1)、中国(2)、台湾(3)、インド(1)、ミャンマー(2)、ベトナム(4)
欧州	キルギス(1)、スウェーデン(1)、ハンガリー(1)、ルーマニア(1)、フランス(1)、ロシア(1)
アフリカ	マラウイ(1)
北米	アメリカ合衆国(3)

調査は、2017 年 10 月下旬から 11 月中旬にかけて、国および地域ごとにおこなった（インタビュー対象者が複数人いる国や地域については､グループインタビューをおこなった)。事前に調査対象者から故郷の家の冷蔵庫の写真をメールで送ってもらい、これを見たうえで具体的な質問内容を決定した。所要時間はそれぞれ約 1 時間とした。

インタビュー調査では、まず、質問紙を用いて、全員に共通の質問（家族構成、食料品

の購入頻度、食料品の購入場所・利用する交通手段・所要時間、外食の頻度、調理済み食品の購入頻度）に回答してもらった。続いて、事前に送ってもらった写真を見ながら、それぞれの写真に写っている食品名や、調理方法、保存方法、使用頻度等を聴き取った。外国人留学生は、日本に来てから母国との違いを、スーパーの食品売り場や食材の保存方法等、あらゆるところで感じているようであった。日本の冷蔵庫や現在の生活と比較しながら、母国の冷蔵庫について説明してもらった。インタビューを進めるなかで、各国・地域の特徴が表れる食品や習慣については、重点的に聴き取りをおこなった。聴き取った内容はメモを取り、インタビュー終了後、速やかに整理した。なお、インタビュー対象者にはあらかじめ研究の趣旨を説明し、写真やインタビュー調査で聴き取った内容を授業等で使用することを了承していただいている。

(2)調査結果

インタビュー調査を通して、それぞれの国や地域の食文化の違いが明らかになった。**表２**は、留学生から聴き取った内容をもとに、各国・地域の冷蔵庫から見える食文化と食生活の特徴を整理したものである。

表 2　各国・地域の冷蔵庫から見える食文化・食生活の特徴

韓国	通常の冷蔵庫の他に、キムチ専用の冷蔵庫がある。毎食必ずキムチを食べており、冷蔵庫の中には大量のキムチと作り置きのおかずがある。また、漢方入りのジュースをよく飲むようである。日本でもよく使用する材料や、よく似ている調味料もある。
中国	卵は量り売りされており、よく使用するため大量に常備されている。ショウガ、ネギ、ニンニクは毎日使用する。
台湾	食品の鮮度を重要視しており、麺も市場で作りたてを購入する。朝食ではおかゆをよく食べる。
インド	冷蔵庫の大半を何種類もの乾燥した豆が占めている。豆は、専門店で量り売りされている。とくにインタビューした家庭はベジタリアンであったため、貴重なたんぱく源である。香辛料は冷蔵庫に入れない。
ミャンマー	エビや魚を干し焼いた保存食が多く入っている。生の唐辛子を食べることもある。
ベトナム	毎日市場に行き、その日に使う材料を購入する。食材は新鮮さをとても大事にしている。冷蔵庫に常備されているコンデンスミルクは、コーヒーに入れたり、パンと共に食べる。

キルギス	食品全般を冷蔵庫にそのまま入れて保存している。肉を食べる機会が非常に多く、肉屋には丸ごと一頭の肉が売られており、そこから必要な分だけを購入する。牛・羊・馬肉は食べるが、宗教上の理由により豚肉は食べない。
スウェーデン	環境問題への関心が高く、家族の中にはベジタリアンの人もいる。有機栽培であることを重要視して食品を購入する。
ハンガリー	乳製品が多く食べられており、とくにサワークリームを料理によく使用する。パプリカパウダーもよく使用する。主食はパスタが多い。
ルーマニア	乳製品をよく食べる。魚の中でも、とくにサバやサーモンをよく食べる。主食はパンで、米はサラダにして食べることが多い。
フランス	チーズなどの乳製品をよく食べる。冷凍庫は別にあり、長期間保存する肉や魚などが入っている。バゲットをよく食べるが、日本の物とは大きく異なる。
ロシア	さまざまな野菜を漬物にして保存している。主食に蕎麦の実を食べることもある。また、ほぼ毎日、午後のお菓子を買いに行く。その他の食品の買い物は、週に 1 回程度まとめておこなう。
マラウイ	トウモロコシの粉で作る主食をよく食べる。調味料が辛く、全体的に辛い食べ物が多い。
アメリカ	食品は日本の物よりもサイズが大きいものがほとんどである。大型スーパーで大量購入する。

調査を進めるなかで、国や地域による特徴が表れるものがいくつか見出されたため、それらについては重点的に質問をおこなった。

①卵は、日本のように 10 個パックで販売されているところは少なかった。とくにアジアにおいては、市場で必要な分だけを量り売りしているところが多かった。また、パックで販売されているところでも、12 個（1 ダース）単位のところが多い。

②飲料水については、国や地域により、水道水を飲むところや、ボトルウォーターを購入するところがある。水道水を飲むときは、一度煮沸することが多い。

③主菜には、宗教上の影響が大きくみられた。地理的な位置や、気候の影響も大きい。

④野菜については、とくにアジアの人々は鮮度を重要視している。日本では見かけることが少ない野菜もある。

⑤冷凍食品や調理済み食品は、ほとんどの家庭で、健康上の安全面などを理由に購入されていない。冷凍庫の中にも、食材以外、あまり入っていない。

以上、14 の国と地域の冷蔵庫を通して、それぞれの食文化・食生活に触れた。冷蔵庫の中にはその国や地域の習慣や文化、宗教、気候、生活様式など、さまざまなことが表れている。留学生の方々は、日本に来てその違いに大変驚いたようである。質問者も、他の国や地域の冷蔵庫の写真を見て話を聴くことで、自宅の冷蔵庫にも、これまでには気づかな

かった日本的な特徴を見出せるようになった。

(3)資料集の作成

小中学校における社会科の授業づくりの資料として用いることを想定し、調査をおこなった 14 の国と地域の冷蔵庫から見える食文化･食生活の特徴を一冊の資料集にまとめた。調査協力者の方々からいただいた冷蔵庫の写真とインタビュー内容に加え、各国・地域の基本データを記載した。**図 1** は、その一部である。

図 1　各国・地域の冷蔵庫から見える食文化・食生活の特徴をまとめた資料集(一部)

3、国際理解の授業の考案と実践

本節では、留学生への食生活調査をもとに考案した国際理解の授業の構想、授業構成の視点、模擬授業実践の概要および考察について述べる。指導案の作成と授業の準備は飯田と進藤がおこない、模擬授業の実践は進藤が担当した。

(1)授業構想

今日、情報化やグローバル化が進み、世界のさまざまな国や地域のヒトやモノとの関わりが深まっている。そのため、学校教育において、外国の生活や文化を知り、それを理解・尊重する態度を育成していくことは大切なことである。

小学校第6学年の教科書『新編　新しい社会　6下』（東京書籍）では、「アメリカ」「中国」「韓国」「サウジアラビア」から各自が関心のある国を1つ選び、その国と日本との関わりについて調べることになっている。しかしそれでは調べる国は1国に限られてしまい、世界には多様な生活や文化が存在していることに気づきにくい。そこで、数か国の「冷蔵庫」の写真を提示し、それぞれ比較しながら各国の生活や文化について考えることで、世界の多様な生活や文化について考えるきっかけとしたい、と考えて本授業案を作成した。

本授業は、「日本とつながりの深い国々」の単元（全5時間）の第2時として構想した。第1時では、私たちが生活するなかで身近に接している外国のモノを取り上げ、私たちは普段、多様な場面で外国のヒトやモノと関わっていることを理解する。第2時では、世界の冷蔵庫を比較し、そこから各国の食文化や食生活を考察していく。第3時、第4時では、これまでの2時間の学習をきっかけに自分が興味・関心を抱いた国を取り上げ、その国の特徴や日本とのつながりについて、調べ学習をおこなう。また、調べた内容を新聞等のかたちで整理する。そして、第5時で発表・共有をおこなう。第2時の授業で多様な国を取り上げることで、児童に世界に目を向けさせ、第3時および第4時の活動につなげていくことをねらっている。

(2)授業構成の視点

本授業の構成においては、主体的・対話的で深い学びを実現させるため、アクティブラーニングの視点を取り入れる。授業の導入では、児童が学習に取り組みやすいように、まず、日本の冷蔵庫の写真を提示する。その特徴を読み取ったのち、世界の冷蔵庫に目を向ける。「日本の冷蔵庫」という身近なものから取り組むことで、児童の「調べたい」という意欲を掻き立てることができるだろう。世界の冷蔵庫を調べる活動では、グループでの簡易的なジグソー学習を取り入れる。個人にそれぞれ役割を与えることでグループへの貢献を通して自己存在感を高められ、全ての児童が授業に参加できる。また、自分が担当した国の冷蔵庫の特徴をグループメンバーに説明することで言語活動の充実が図られ、自分が調べた内容を相手に分かりやすく伝えようとさまざまな工夫がなされるだろう。そして、それぞれの写真がどの国の冷蔵庫かグループで予想することで、児童がゲーム感覚で授業に参加することができるのではないだろうか。本授業では、児童の多くが比較的よく知っている韓国、アメリカに加え、あまりよく知らないインド、全く知らないであろうキルギスの4か国を取り上げた。これらの国の冷蔵庫は、日本と異なる特徴を有しており、児童が世界の生活や文化を意欲的に調べることにつながると考えたからである。

このように、外国の冷蔵庫について調べることで、世界のさまざまな生活や文化に興味を持たせるとともに、日本の生活や文化の特徴についてもあらためて考えることにつながるだろう。

(3)模擬授業実践の概要

2018年1月31日（水）2時限に大阪教育大学教員養成課程の「社会」の授業において、受講生（当日出席者 56 人）を対象に模擬授業「冷蔵庫の写真から世界の食文化を調べよう！」をおこなった。受講生のほとんどが1回生で、学校教育コース、保健体育コース、

音楽教育コース、特別支援教育専攻の学生が多いクラスである。模擬授業開始前に小学 6 年生の児童役をつとめて欲しいことを受講生に伝え、4 人組の班編成をおこなった。

まず、パワーポイントで日本の冷蔵庫の写真を提示し、どのような特徴があるかを全員で考えた。続いて、これから世界の冷蔵庫の写真から世界の食文化を調べる学習をすることを伝え、ワークシートに本時のめあてと日本の冷蔵庫の特徴を記入させた。

つぎに、4 人ずつの班に分かれ、配布された 4 か国の冷蔵庫の写真を調べ、それぞれどこの国のものなのか班で協力して当てる活動に入った。1 人が 1 国ずつ写真を担当してその特徴を読み取り、読み取った内容をグループの他のメンバーに説明した。初めは何の説明もない写真（**図 2**）を配布したため、冷蔵庫のなかに何が入っているのかわからず、読み取りに苦労していたが、説明入りの写真（**図 3**）を配布すると、内容物がわかるようになり、考察が深まっていった。それでも当てづらい国があるので、10 か国の国リストを示し、そのなかから正解を選ぶようにした。

各班での話し合いの後、それぞれの班が出した答えを発表し、答え合わせをした。韓国、アメリカは正解した班が多かったが、インドは 1 班しか当たらず、キルギスについては正解した班はなかった。その後、それぞれの写真のポイントを解説し、その国の食文化・食生活の特徴を説明してまとめ、世界地図で国の位置を確認した。

最後にもう一度、日本の冷蔵庫の写真を提示し、他国と比較することによって見えてくる日本の冷蔵庫の特徴について全員で考えた。外国だけでなく日本の冷蔵庫も取り上げることで、外国の生活や文化の特徴に気づくだけでなく、外国との比較からあらためて日本の生活や文化の特徴をとらえ直すことのできる授業ができたのではないかと思う。

模擬授業終了後、受講生に授業の感想と評価を書いてもらった。

模擬授業の学習目標と展開は**表 3**、使用したワークシートは**図 4** に示している。

図 2　配布資料 1 枚目（解説なし）

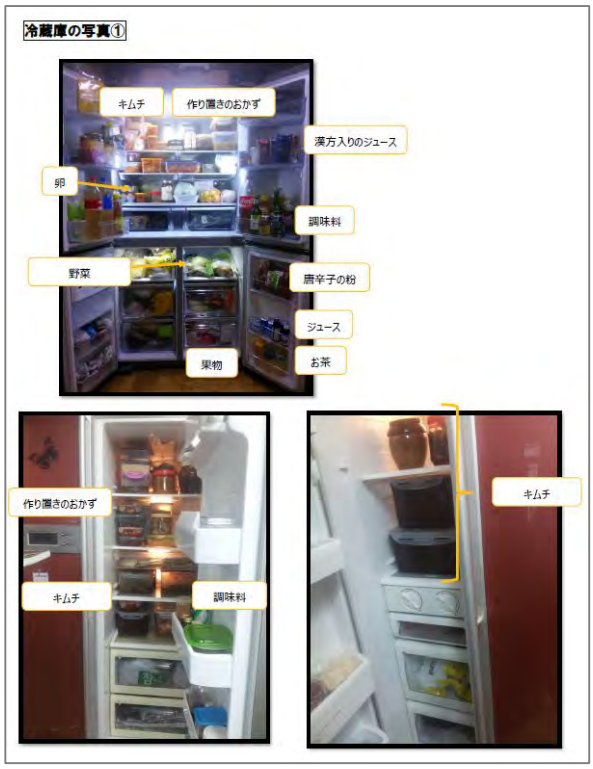


図 3　配布資料 2 枚目（解説付き）

表３　模擬授業の学習目標と展開

本時の学習目標

・世界の食文化は、日本と異なっており、それぞれに特徴があることを理解する。(知識・理解)

・各国の食文化について、さまざまな国の冷蔵庫の写真を比較しながらその特徴を表現できる。(思考・判断・表現)

本時の展開

学習過程	学習内容	指導上の留意点	評価・準備物等
導入 3 分	・日本の冷蔵庫の特徴を考える。 ・学習課題の確認をする。	・パワーポイントに提示された日本の冷蔵庫の写真から、特徴を読み取らせる。 ・最後に復習するため、あまり時間を使いすぎないよう注意する。	・冷蔵庫の写真 ・パワーポイント
	冷蔵庫の写真から世界の食文化を調べよう！		
展開 2 分	・これからおこなう調べ学習の手順を説明する。	・活動の説明として、導入からの流れで日本の冷蔵庫の特徴を読み取らせる。 ・ワークシートの書き方を説明する。	・ワークシート
15 分	(グループ活動) ・グループで分担して、4 ヵ国の冷蔵庫の写真から特徴を読み取り、ワークシートに記入する。	・はじめは写真のみで考えさせ、次に写真と説明が混合したものを配布する。 ・解説無しの写真だけでは、特徴を他国と比較して探すことが予想されるため、早めに解説付を配布する。 ・食材の保存方法について考察している児童がいれば、後で取り上げる。	・配布資料 1 枚目（解説なし） ・配布資料 2 枚目（解説付き） ・世界の食文化は、日本と異なっており、それぞれに特徴があることを理解している。 (知識・理解)
10 分	・1 人 1 国担当し、調べた内容についてグループメンバーに説明する。		
5 分	・それぞれの特徴を読み取った後、国リストの中からその国の冷蔵庫だと思う国を考える。	・それぞれの国の有名な料理を考えることで、どこの国の冷蔵庫か、予想をする。	・国リスト ・各国の食文化について、さまざまな国の冷蔵庫の写真を比較しながらその特徴を表現できている。 (思考・判断・表現)
5 分	・冷蔵庫の写真がどこの国のものか答え合わせをした後、世界地図でその国の位置を確認する。	・なぜその国を選んだのか、その理由を聞く。 ・答え合わせをしたのち、世界地図でそれぞれ 4 か国の位置を確認する。 ・キルギスについては解説を入れる。	
終結 5 分	・もう一度日本の冷蔵庫の写真を提示し、他国と比較したことから見える日本の冷蔵庫の特徴について考える。 ・感想を記入する。	・まとめとして、他国にはそれぞれ異なる食文化が存在していることを押さえるとともに、日本の食文化も他国と比較してみれば特徴が見えることを理解させる。	

授業ワークシート No.1

☆ポイント☆
日本の冷蔵庫と違うところ(置く場所・保存方法)を見つけてみよう！

6年　組　番　氏名

1. 各国の冷蔵庫の特徴を整理しよう！

①（　　） 【冷蔵庫の特徴】 【食文化・食生活等】	②（　　） 【冷蔵庫の特徴】 【食文化・食生活等】
③（　　） 【冷蔵庫の特徴】 【食文化・食生活等】	④（　　） 【冷蔵庫の特徴】 【食文化・食生活等】

（例）日本

【冷蔵庫の特徴】

【食文化・食生活等】

2. 各国の位置を確認しよう！

3. 感想

図４　ワークシート

(4)模擬授業の考察

模擬授業では、自由に発言できるような雰囲気を作り、児童役の学生の発言を積極的に拾い、それをうまく授業の流れに組み込むことができた。授業にアクティブラーニングの視点を取り入れたことで、主体的かつ協働的に学習する姿が見られた。

導入では、最初に日本の冷蔵庫の特徴を考えたことで、学生に興味を持たせることができ、世界の冷蔵庫を調べる活動に多くの学生が意欲を持って取り組んでいる様子が見られた。また、「日本の冷蔵庫はあまり特徴が見られない」という印象を与えることができた。

展開では、まず解説なしの 4 か国の冷蔵庫の写真を配り、その特徴を読み取らせた。机間指導中、写真だけの資料から読み取れる情報が少なく、「これ何ですか？」と聞いてくる学生もいた。そこでは答えを言わず、後に解説付きの写真を配ることで、学生の興味を引き続けることができた。各国の特徴を読み取るさいに、日本の冷蔵庫の写真が手元にあれば、それと比較することで特徴を見つけやすかったのではないだろうか。グループ活動では、話し合いを進めるうちに、最初は特徴を見つけられなかった学生も、他のメンバーの話を聞きながらワークシートを完成させることができていた。しかし、簡易的なジグソー学習を取り入れ、各人に説明する時間を設けたため、グループ間で所要時間、到達点の両方に差が見られた。その点では、グループメンバーに説明する時間に制限を設け、全グループの足並みをそろえてもよかった。

それぞれの冷蔵庫がどの国のものか各班の予想を発表してもらうさいには、国名だけでなく、そのように考えた理由も聞くべきだった（本授業では、授業者が時間内に終わらないと判断したため、国名だけの発表に留めた)。そうすることで、他の班の考え方と比較したり、予想の過程を評価したりすることができ、各国の食文化についてのまとめも、板書を写す以上の発見があったのではないだろうか。また、ワークシートに載せた地図の印刷が薄かったため、4 か国の位置確認が不十分だった。

終結で再度日本の冷蔵庫について考えたさいには、肉がパックで保存されていることや、卵がパックで売られていること、製氷機があることなど、予想していた以上に日本の冷蔵庫の特徴を発見することができた。ただし、コミュニケーションカードの記述から、世界の冷蔵庫から各国の食生活や食文化の違いを理解することに留まり、外国と比べることで日本の冷蔵庫にも食生活や食文化を反映したさまざまな特徴が見出せることを理解し、日本の特徴をあらためて考える段階にまで進んでいない学生もいたことがわかった。

４、おわりに

本学の留学生の協力を得て、世界のさまざまな国と地域の冷蔵庫を通して見える食文化・食生活の特徴を調べ、これをもとに国際理解の授業の考案と模擬授業の実践をおこなうことができた。「冷蔵庫」という子どもにとって身近なモノを教材にすることで、他国の異なる文化の存在に気づき、理解していくことが可能になるのではないだろうか。インタビュー結果をもとに世界の冷蔵庫の様子についての資料集を作成したため、対象学年に応じて教材の扱い方を柔軟に変えることが可能である。

2017 年度後期の「社会学教育論」の授業では、模擬授業のみの実践に留まり、実際の授業をするには至らなかった。しかし、インタビューという手法を用いて、本学の留学生の

協力のもと、国際理解の教材開発をおこない、授業を考案することができたこと、さらに、模擬授業というかたちで、この試みを教員養成課程の学生たちに提示することができたことは、大きな成果である。同じキャンパスで学ぶ留学生との交流を生かした国際理解のための教材開発の試みを今後も続けていきたい。

謝辞

それぞれの国や地域の冷蔵庫の写真を提供し、インタビュー調査に快く応じてくださった外国人留学生の皆様、協力してくれる外国人留学生を紹介してくださり、調査方法について有効な助言をくださった国際センター准教授の古川敦子先生に、感謝申し上げます。ありがとうございました。

大学予科教育からみた台湾大学の和算書 *

城地　茂
グローバルセンター　国際事業部門

1. 緒言

台北市南部の大安区は、多くの大学が集まる文教地区として知られている。国立台湾大学（旧制・台北帝国大学）·国立台湾師範大学（旧制・台北高等学校跡地に設立）·国立台北教育大学（旧制・台北第二師範学校）·国立台湾科技大学（1974 年創立）·国立台北科技大学（旧制・台北工業学校）といった台湾の各分野で有名な大学が並んでいる。

これらの大学は、総合（一般）大学の国立台湾大学、教員養成系大学の国立台湾師範大学・国立台北教育大学、技職系大学の国立台湾科技大学、国立台北科技大学と分野別に分けられる。このうち、技職系大学の考察は、拙稿（2010）「台湾の高等技術教育の法制と実態」において行った。そこで、本稿では、総合大学である国立台湾大学を日本統治時代の古書の観点から考察し、台湾の教育制度を理解するための一助としたい。

2. 台北帝国大学時代の書籍の再発見

2004年、国立台湾大学の文学院（文学部）講演堂より、台北帝国大学時代の書籍（一部、台湾大学移管後の書籍を含む）が発見された。これらは、5553冊の漢籍、2744冊の線装本、1256冊の近代の書籍（1945年以前）という膨大なものであった。この中に、理学部数学教室の蔵書印のあるものや、その他の機関ものも含め、約550点に及ぶ和算書[1]があった。この数は、海外の和算コレクションでは、報告者の知るかぎり最大のものだろう[2]。和算書972冊[3]という数値も同様であるが、この冊数は、再発見された線装本のうち1/3以上を占めていることが分かる。また、後述するように、日本内地の旧帝国大学数学教室に匹敵する数量であり、日本から移入したことを考えれば、膨大な数量である。

これらの和算書は、台北帝国大学予科長として和算研究者の加藤平左ヱ門（1891-1976）教授が数学教室に在籍していた[4]。加藤平左ヱ門教授は、和算研究の中心の一つである東北帝国大学で薫陶を受けており、そのため、台湾大学の和算書購入では、専門家の助言を受けることができたのである。また、数学教室には、松村宗治（1887-1959）がいたが、や

* This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number (C) 16K01162, and by the Research Institute for Mathematical Sciences, a Joint Research Center located in Kyoto University, the Study of History of mathematics, 2016.

[1] 「台北帝国大学図書印」がほとんどにあり、「国立台湾大学図書印」とあるものは、これまでのところ 19 点だけである。なお約 550 点の中には、天文学などいわゆる「暦算」書も含まれる。また、概数でしか報告できないのは、まだ目録もできておらず、報告者が見た限りでも、揃の和算書が分散されて仮登録されるなどしているからである。また、術数書（卜占）も含まれているため、この数値は仮のものである。

[2] 国外最大級と言われているアメリカ議会図書館は、404 点である。

[3] 冊数にも理学書などが入っており、仮のものである。

[4] 台湾大学が台湾政府に移管後も、加藤教授は「留用」されて、台湾大学教授に就任している。これは、日本人の専門職が急に帰国しては、その機関が運営に支障が出てしまうための措置で、技術者などにも留用者が少なくなかった。なお、略歴は、1891 年愛知県生まれ。1923 年東北帝国大学理学部数学科卒。同年松江高等学校教授。1927 年台北高等学校教授。1944 年台北帝国大学予科長。数学教室。1945 年台湾大学数学系教授。1949 年名城大学理工学部教授。（加藤平左ヱ門・佐々木力（編）（1957; 2011）『和算の研究・方程式論』著者紹介）である。

はり東北帝大数学科出身である。そのため、両者の合意の下、収集されたものと考えられる。

台湾大学本は、不正規の場所に置かれていたため、状況は極めて悪い。虫食いも激しく、さらに高湿度だったためか、硬化してしまって、ほとんど開けない本もある。2018年現在は、すでに燻蒸、消毒されていて、修復されたものもある。今後、整理・修理された和算書は、目録を作成し、デジタル公開されることになるだろう。

3. 国立台湾大学について

(1) 旧制・帝国大学

台湾大学は、1946 年に開校しているが、その前身は、1928 年に設立された９帝国大学の一つである台北帝国大学である。外地の２校の帝国大学として、内地の帝大とは少々異なる存在ではあった。

まず、この９帝大をみてみよう。

表１　帝国大学の学部と予科、専門部

設立		名称	学部[5]
1	1886 年	東京帝国大学	理・一工・二工・医・農・法・文・経、医専
2	1897 年	京都帝国大学	理・工・医・農・法・文・経、医専
3	1907 年	東北帝国大学	理・工・医・法文、医専
4	1911 年	九州帝国大学	理・工・医・農・法文、医専・工専
5	1918 年	北海道帝国大学	理・工・医・農、予科・医専・農林専、土木専
6	1924 年	京城帝国大学	理工・医・法文、予科
7	1928 年	台北帝国大学	理・工・医・農・文政、予科・医専・農林専
8	1931 年	大阪帝国大学	理・工・医・医専
9	1939 年	名古屋帝国大学	理・工・医・医専

上記のように、大学予科教育は、北海道大学と外地の帝大にしか置かれず、内地では、ほとんどは旧制・高等学校高等科で教育を行っていた。このうち、北海道とソウルには高等学校がなかったが、台北には、先述のように、台北高校[6]があったが、帝大予科も置かれていた。

台湾には、大日本帝国憲法が及ぶか及ばないかが論争になったほどで、法制度も内地とは異なっており、帝大の設立は内地が文部省の管轄であったのに対し、台北帝国大学は台湾総督府の管轄であった。また、京城帝大は朝鮮総督府管轄だった。

(2) 台北帝大理学部数学講座と予科

1928 年に台北帝大が設立され、表１のように理学部も置かれたが、数学は専攻としては置かれず、数学講座は各専攻に数値処理を教育していた。台北高等農林学校[7]（帝大設立後は、附属農林専門部）から、松村宗治教授と服部博助手が数学教室に着任した。

---

[5] この他に、帝大の特権ともいえる大学院もあった。

[6] 1922 年に設立されたときには尋常科だけだったが、1925 年に高等科も増設された。

[7] 1919 年、台湾総督府農林専門学校設立、1922 年、台湾総督府高等農林学校と改名、1927 年には、台湾総督府台北高等農林学校と改名、1928 年には台北帝国大学へ移管された。

また、1925 年に台北高校高等科が置かれ、1927 年には加藤平左ヱ門教授が着任した。加藤平左ヱ門教授は、1941 年に台北帝大予科ができると兼任し、1944 年には予科長になっている。

4. 和算書の収集

帝大の設立の順番や地域的な特徴もあり、東北帝大では、数学教育も手掛けていた。林鶴一教授も、東北帝大教授として、数学教育を含めた研究・教育を行い、そこから和算研究を始めたのである。この伝統は、藤原松三郎教授らに受け継がれ、日本最大の２万点を超す和算書を東北大学は所蔵している。本稿で取り上げる台北帝国大学で教鞭をとった松村宗治教授や加藤平左ヱ門教授も東北帝大出身である。

また、東京では、帝国学士院（現・日本学士院）で遠藤利貞（1843-1915）氏や三上義夫（1875-1950）博士が和算研究を進めており、１万点近くの蔵書を有している。

江戸時代の出版は、言うまでもなく、三都、江戸、京都、大阪が出版の中心である。これに次ぐものとして、大藩の城下町の書店がある。名古屋とか金沢である。加藤平左ヱ門教授が和算研究を始めた昭和初頭では、このように和算研究の中心が東京以東にあり、江戸の古書は相当数、これら和算研究の中心地に集められていた。さらに、東京帝大も少なからぬ和算書を集めた。ところが、京都の書店は、京都大学が集めたであろう が、大阪の帝大設置は、台北帝大の後になっている。大阪・伊藤介夫（1833-1912）旧蔵（有不為斎本）の『大成算経』 が昭和 15 年 6 月 11 日に入っているように、大阪の和算書は研究機関の手に渡っていなかったようである。また、加藤平左ヱ門教授の出身は愛知県であり、地縁的な関係から、中部地方の和算書を集めたようで、名古屋の算額を写したと思われる写本もある 。

前述のように東北帝大で和算の知識を持っていたであろう２名が、台北帝大に集うことになったのである。1929 年には数学講座が設立されたが、和算書は現在のところ、547 点が発見されている[8]が、そのうち、昭和 4 年（1929 年）に納入されたものは、2 点だけである。以下、各年ごとに納入された和算書の数値をまとめたのが表２である。

表２　台北帝国大学および台湾大学の和算書受領年（2018 年 2 月調査時点）

昭和　４年	４点	数学講座設立
昭和　９年	１点	
昭和１１年	６点	
昭和１２年	１２点	
昭和１３年	２１点	
昭和１４年	９３点	
昭和１５年	８８点	
昭和１６年	７５点	帝大予科設立
昭和１７年	４３点	
昭和１８年	４２点	
昭和１９年	６８点	
昭和２０年	１点	
民国３６年（1947 年）	１９点（うち１点は昭和１６年の印あり）	

[8] 暦書や天文学、術数書も含むため、正確な数値は不明である。

不詳　　７４点
合計　　５４７点
　このように、７－８年の間に、外地にも関わらず、内地の帝大に匹敵する和算書が急速に集められたのが分かる。

5. 和算書の利用

　こうした大量の和算書は、どのように活用されたのか見て行きたい。加藤は、1939年に最初の和算論文である「和算ノ行列式展開ニ就テノ検討」を発表している。1943 年には、台北高校から『和算ノ方程式論』を出版している。これは、後年、『和算の研究・方程式論』(1956) の基礎となるものであった。1944 年には、『和算ノ整數論』を出版している。
　このように、和算研究の基礎が、昭和復刻本を含めた和算書の中から生まれたのである。
　また、李登輝前総統（1941 年台北高校入学）の回顧によれば、加藤教授の高等微積分の講義は「普通の微積分ではなく、数学の歴史と概念を教えた」[9]とある。
　台湾大学での講義では、「歴史ではなく、和算と西洋数学の比較」であった[10]と言われている。いわゆる「現在史観」（現在（昭和初年）を基準に置く歴史観）だったと言えよう。
一方、松村宗治は、1940 年に、「高等学校高等科数学新教材」[11]を発表している。これは、和算ではなく、洋算の新たな教材を模索するもので、数学の題材を広く集めていた。和算の課題を解き方は現代数学でと考えていたのかもしれない。

6.終戦と留用、そして復員

　戦後、台湾大学に移管されると、台湾大学先修班[12]（予科）に、加藤平左ヱ門教授、松村一雄が台湾大学数学系に「留用」された[13]。後に、加藤教授は、理学部数学系に移り、そこには、先に述べた松村宗治教授（理学部数学講座[14]）も「留用」されて在籍していた。台北帝国大学の和算書は、接収され、台湾大学へと移管された。さらに、戦後も 19 点増加している。これらは、たとえば、加藤教授の場合、1947 年 5 月 8 日に佐世保に復員[15]している[16]が、そして、そのすべてが民国 36（1947）年 4 月 28 日付である。加藤教授や松村教授ら「留用」されていた日本籍教授が帰国の際に手放したものと考えるのが自然である。

---

[9] 徐聖凱（2009）『日治時期臺北高等學校之研究』137.なお、同窓の林宗穀氏によれば、和算だったと明言している。黄美倫（2013）『臺北高等學校數學教育初探 ―以學生筆記為例』
[10] 霍崇熙・莫宗堅「(台湾大学) 数学系史」
https://mathntu70anniversary.wordpress.com/2016/11/30/%E6%95%B8%E5%AD%B8%E7%B3%BB%E5%8F%B2/
[11] 松村宗治（1940）「高等学校高等科数学新教材」『台湾教育』452:40－46.
[12] 1947 年 6 月に廃止になっている。
[13] 予科からの教員は、加藤平左ヱ門、森政勝、松村一雄、池田義一郎、高田德太郎、立石新吉、都留正雄、宇都宮清吉、溝邊龍雄、須藤襄、今澤正雄、佐藤文一、久保田肇、岩崎英勇、富岡健次郎、東日出男、大濱皓、手島逸郎、甲東謙、遠田一男、吉田榮松、河上邦治であった。
[14] 村松教授以外にも、数学系には、岩崎英勇教授、吉田栄松教授、遠田一男教授が留用されていた。
[15] 台湾総督府残務整理事務所、台総出 1083 号（1947 年 8 月 1 日）。
[16] 遠田一男教授は、1947 年 1 月以前に復員しているが、他の数学系 4 名の日本籍教授は、1947 年 3 月以降まで台湾に残っていた。

こうして、戦前の高等教育の場でも活用された、あるいはされる予定だった和算書が、台湾大学に数多く残されることになった。数的質的にも優れ、従来の研究機関の和算書とは版本が異なる可能性もある貴重な蔵書群である。

参考文献

歐素瑛（2005）「戰後初期臺灣大學留用的日籍師資」『国史館学術集刊』6：146−192.

徐聖凱（2009）『日治時期臺北高等學校之研究』台湾師範大学台湾史研究所碩士論文.

城地茂（2010）「台湾の高等技術教育の法制と実態」『（大阪教育大学）国際センター年報』16: 14-22.

城地茂（2011）「国際化とダブル・ディグリー制度－台湾を中心に」『（大阪教育大学）国際センター年報』17: 15-20.

城地茂（2012）「台湾における教育実習の法制と実態」『（大阪教育大学）国際センター年報』18: 8-14.

城地茂（2014）「日本留学の動機調査—台湾からの交換留学生を例として」『（大阪教育大学）国際センター年報』19: 3-11.

城地 茂（2016）「台湾における数学学会の交流」『（大阪教育大学）国際センター年報』20:4-9.

城地 茂（2017）「台湾の小学校における円周率の教育と数学史」『（大阪教育大学）国際センター年報』21: 15-21.

城地茂（2017）「台湾大学の和算資料初探」『中華科技學會學刊』22/ 1: 106-115.

黃美倫（2013）『臺北高等學校數學教育初探 —以學生筆記為例』台湾師範大学数学系碩士論文.

井上広樹（2014）「国立台湾大学における日本人留用政策」『日本台湾学会報』16：84−106.

平成 29 年度　国際センター　活動報告

１．日本語・日本事情教育

平成 29 年度に留学生のために開講した授業、及び受講者の内訳は下記の通りである。教養学科から教育協働学科への改組に伴う留学生の定員化に対応するために、平成 29 年度より学部生向けの日本語科目の「日本語Ｉa」「日本語Ｉb」が 2 クラス開講となり、「日本の教育と若者文化」「日本古代文化史」「教育と国際化」の 3 科目が学部留学生向けの科目として新たに開講された。また、3 回生対象の「外国語実践演習」も今年度から開講された。

また、今年度は、本学への交換留学を希望する海外協定校の学生向けに、「留学生のための日本語授業（授業概要）」を英文で作成し、ホームページにて公開した。

学部留学生のための授業

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1回生	日本語Ｉa・Ｉb	1×2（前・後）	金・Ⅰ	長谷川ユリ
	日本語Ｉa・Ｉb	1×2（前・後）	金・Ⅱ	高谷由貴
	日本の教育と若者文化	2（前）	月・Ⅲ	中山あおい
	日本古代文化史	2（前）	月・Ⅲ	中山あおい
	教育と国際	2（後）	金・Ⅲ	城地茂
2回生	日本語Ｉa・Ⅱb	2×2（前・後）	火・Ⅰ	村井巻子
3回生	外国語実践演習（日本語）	2（後）	木・Ⅰ	長谷川ユリ

教養基礎科目（※日本人学生とともに受講できる授業）

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1回生	日本事情	2（前）	水・Ⅱ	長谷川ユリ
	国際理解	2（後）	水・Ⅱ	中山あおい
	日本科学技術史概論	2（後）	木・Ⅳ	城地茂

日本語日本文化研修留学生、交換留学生のための授業

レベル	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
中上級	時事日本語Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	水・Ⅰ	古川敦子
	日本語中上級漢字Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅳ	城地茂
	日本語中上級読解Ⅰ	2（前）	木・Ⅱ	長谷川ユリ
	日本語中上級読解Ⅱ	2（後）	月・Ⅱ	間晶子
	日本中上級総合Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	木・Ⅲ	古川敦子

中級	日本語中級文法Ⅰ	2（前）	木・Ⅲ	長谷川ユリ
	日本語中級文法Ⅱ	2（後）	木・Ⅱ	長谷川ユリ
	日本語中級会話Ⅰ	2（前）	月・Ⅱ	間晶子
	日本語中級会話Ⅱ	2（後）	月・Ⅲ	間晶子
	日本語中級作文	2（前）	月・Ⅲ	間晶子
	日本語中級漢字Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅱ	城地茂
	日本語中級読解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅲ	高谷由貴
	日本語中級聴解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅱ	村井巻子
初中級	日本語初中級a	2（前）	火・Ⅲ	古川敦子
	日本語初中級b	2（前）	水・Ⅱ	古川敦子
	日本語初中級c	2（前）	木・Ⅰ	長谷川ユリ
	日本語初中級d	2（前）	木・Ⅱ	古川敦子
	日本語初中級e	2（前）	金・Ⅱ	長谷川ユリ
	日本語初中級f	2（後）	火・Ⅲ	古川敦子
	日本語初中級g	2（後）	水・Ⅰ	長谷川ユリ
	日本語初中級h	2（後）	水・Ⅱ	古川敦子
	日本語初中級i	2（後）	木・Ⅱ	古川敦子
	日本語初中級j	2（後）	金・Ⅱ	長谷川ユリ
	日本の社会と文化Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅲ	中山あおい
	日本近現代史	2（前）	木・Ⅳ	城地茂
	日本近世文化史	2（後）	金・Ⅲ	城地茂
	大阪の文化Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅳ	国際センター教員
	日本の伝統文化Ⅰ	2（前）	火・Ⅴ	中山あおい他
	日本の伝統文化Ⅱ	2（前）	金・Ⅰ	中山あおい他
	文化交流実践研究	2（前・後）	集中	国際センター教員
	日本文化研究	2（前・後）	集中	指導教員

前期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	45
研究生	0
教研生	7
日研生	6
交換留学生・特別聴講生	32
計	90

後期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	53
研究生（研究留学生）	1
教研生	7
日研生	11
交換留学生	31
計	103

前期受講者数出身別内訳

出身	人数
中国	46
韓国	12
ベトナム	7
台湾	5
タイ	3
その他アジア	7
ヨーロッパ	7
中南米	1
アフリカ	2
計	90

後期受講者数出身別内訳

出身	人数
中国	51
ベトナム	10
韓国	9
台湾	4
キルギス	4
その他アジア	10
ヨーロッパ・アメリカ	11
中南米	2
アフリカ	2
計	103

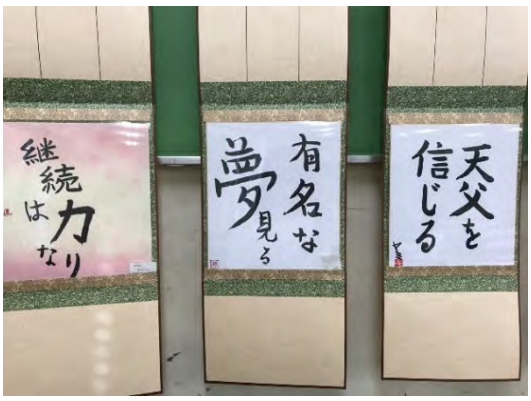
日研生、交換留学生用の授業の中からフィールドワークや体験を取入れたものを紹介する。

(1)「大阪の文化」

本学が大阪にあるという特色を生かし、大阪やその周辺の文化や歴史、社会について、フィールドワークを通して学んでいくオムニバス形式の授業である。「大阪の文化Ⅰ」（前期開講）では、大和板紙株式会社（古紙リサイクル）、大阪城を見学し、「大阪の文化Ⅱ」（後期開講）では、大阪くらしの今昔館・仁徳天皇陵古墳の見学、能の体験（観世流能楽師の山中雅志氏による講演）などを実施した。それぞれの見学・体験の前にはセンター教員及び学内の教員による講義を行った。また、見学・体験授業後、グループワークで大学周辺地域を学生が調査・観察をするフィールドワークを行った。

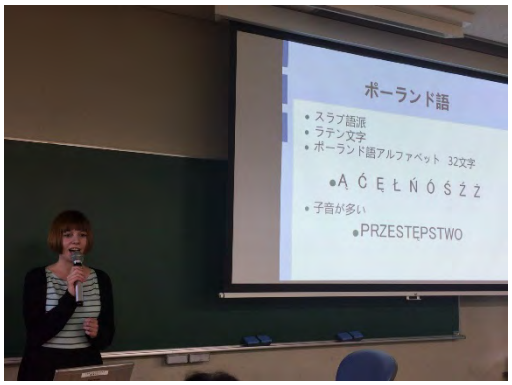
⑵「日本の伝統文化」

「日本の伝統文化Ⅰ」は、国際センターと保健体育講座、美術教育講座、音楽教育講座の教員によるオムニバス授業であり、留学生は剣道、陶芸、日本の童謡などを体験学習する。「日本の伝統文化Ⅱ」は、美術教育講座の協力のもと、書道を基礎から学ぶ授業である。漢字やかなの書き方から始め、年賀状や色紙の作品も書き上げた。一回だけの体験でなく、継続的に学べることが特徴である。



⑶ 「文化交流実践研究」

留学生が大学や地域の人々と交流することで日本や日本人の考え方、日本の文化に対する理解を深めるだけでなく、日本の学生や地域住民の異文化理解を促進することを目的に開講している授業である。大阪府立柏原東高等学校、附属高校平野校舎での自国文化の紹介や生徒との交流、地域のボランティアグループとの交流の一環としての自国文化の紹介を行った。



２．修了レポート発表会

平成 29 年度の「修了レポート発表会」は、前期は修了者の人数が 31 名と多かったため、8 月 3 日、4 日の 2 日に分けて行われ、後期は 2 月 9 日に開催された。日本語日本文化研修留学生、交換留学生、教員研修留学生に加え、韓国忠南大学の「1 セメスタープログラム」の参加学生（忠南プログラム生）も修了発表に参加し、留学における勉学、研究の成果を発表した。留学生の指導教員をはじめ、国際センター教員、日本人学生から活発な意見や質問が出された。また、優れた発表を行った学生を選び、前期、後期の修了式において表彰した。

前期	2017/8/3 9:00～16:00 2017/8/4 9:30～12:15	交換留学生	22	31
		日研生	6	
		特別聴講生（忠南プログラム）	3	
後期	2018/2/9 10:00～15:40	交換留学生	11	18
		教研生	7	

３．交換留学（受入と派遣）※特別聴講生を含む

受入	韓国	9	36 名
	中国	8	
	台湾	4	
	タイ	3	
	ベトナム	3	
	フランス	3	
	アメリカ	3	
	キルギス	2	
	ドイツ	1	
派遣	韓国	5	24 名
	アメリカ	4	
	フランス	4	
	ドイツ	4	
	オーストラリア（GELI+含む）	3	
	スウェーデン	2	
	台湾	1	
	フィンランド	1	

本学が学生交流協定を締結している海外の大学は平成 29 年 4 月現在で 13 カ国・地域の 30 機関である。このうち、過去 5 年間に受入実績があるのは 10 カ国・地域 25 機関で、受入で実績がない国はスウェーデン、フィンランド、カナダである。カナダは派遣のみの特別な学生交流協定を締結しているため、スウェーデンとフィンランド以外の国からの受入は全般的に活発に行われていると言える。

これに対して、過去 5 年間に派遣実績があるのは 8 カ国・地域 14 機関にとどまっている。この間派遣実績がない国は、中国、ベトナム、タイ、キルギス、カナダである。欧米やオーストラリアに比べてアジアへの留学希望者は少ないが、その中で、韓国、台湾への留学は、この 3, 4 年ほどで確実に増えている。派遣学生の人数としては、28 年度の 14 名から 24 名と、倍近くに増加した。派遣学生を増やすために国際センターが実施している留学相談や説明会等における情報提供、派遣学生のための授業料免除制度や各種奨学金に関わる取組などが人数増加に結びついていると考えられる。

29 年度に実施した説明会等は以下の通りである。

4 月 19 日　海外研修説明会・成果発表会
4 月 26 日　交換留学説明会
4 月 26 日　トビタテ！留学 JAPAN 説明会
10 月 11 日　海外研修説明会
10 月 18 日 交換留学説明会・経験者発表会
10 月 18 日、25 日　海外研修成果発表会

今年度は、日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（協定派遣・協定受入）に「グローバルな視野をもつ教員を育成するための教育観察実習プログラム」「大阪教育大学・地域リソースプログラム」が採択され、受入学生 31 名、派遣学生 10 名に奨学金が授与された。また、派遣学生 3 人が「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」、6 人が「業務スーパージャパンドリーム財団」奨学金、1 人が「馬場財団国際理解教育人材養成奨学金」の奨学生として採用された。

４．日研生、教研生、研究留学生の受入

平成 29 年度の日本語日本文化研修留学生（日研生）の受入れ人数は 11 名であり、前年度の 6 人から 5 名増加した。11 名のうち、大使館推薦は 7 名、大学推薦は 4 名である。研究留学生はキルギスから 1 名受け入れている。

教員研修生は、平成 28 年 10 月から大阪教育大学で研究活動を始めた 1 名に加え、平成 29 年 4 月からは大阪大学で予備教育を修了した 6 人を受け入れている。

日本語日本文化研修留学生	ブラジル	1	11 名
	インド	1	
	ミャンマー	3	
	ベトナム	2	
	スウェーデン	1	
	ハンガリー	1	
	キルギス	1	
	中国	1	
研究留学生	キルギス	1	1 名
教員研修留学生	韓国	1	7 名
	中国	1	
	ルーマニア	1	
	メキシコ	1	
	フィリピン	1	
	マラウィ	1	
	ロシア	1	

29 年度は、日本人学生との相互理解を深めるための企画として、「国際交流プログラム」を 10 月から 12 月にかけて 3 回実施した。主に日研生と教研生が講師となり、キルギス、マラウイ、ルーマニア、メキシコ、ベトナム、ハンガリー、インドについて紹介した。

５．語学研修・文化研修

国際センターで実施している語学研修・文化研修は、一部のプログラムを除き単位化され、出発前の事前講義の受講、帰国後の発表を含む全ての条件が満たされた場合、教養基礎科目の「海外文化研究」の 2 単位が与えられている。また、平成 29 年度は、アメリカ、ドイツ、フランス、韓国、台湾、シンガポールのプログラムが日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（協定派遣 短期研修・研究型）に採択され、一部の参加者に奨学金が付与された。コンケン大学での研修は、東京学芸大学との共同で行われた。

国・地域	研修期間	研修先	人数	計
ドイツ	2017/8/6-9/4	トリア大学	3	30
タイ	2017/8/15-8/24	アユタヤ・ラジャパット大学	5	
アメリカ	2017/8/18-9/29	University of North Carolina Wilmington	7	
韓国	2017/9/5-9/13	ソウル教育大学	3	
タイ	2017/11/25-12/3	コンケン大学他	3	
オーストラリア	2018/2/8-3/15	Griffith University	3	
シンガポール	2018/2/11-2/24	南洋理工大学	1	
台湾	2018/3/12-3/21	国立台北教育大学	5	

(1) アメリカ観察実習・語学研修

本年度も研修先は本学と協定を結ぶアメリカ合衆国ノースカロライナ大学ウィルミントン校（UNCW）で、5 週間の英語研修の後、近隣の小学校において 2 日間の観察実習を行った。また、参加者はホームステイ先でアメリカの生活スタイルや文化を体験することで、アメリカへの理解を深めた。

現地の学校での観察実習では、日米の教育について様々な観点から比較するとともに、日本の遊びなどの文化紹介を行い、小学生との交流を図った。また帰国後は、報告会において、それぞれが研修の成果を発表した。

なお、本研修は日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（協定派遣　短期研修・研究型）「国際的な視野をもつ教員を育成するためのアメリカ教育観察実習プログラム」に採択され、参加学生に JASSO 奨学金が付与された。

(2) オーストラリア語学研修

29 年度もブリスベンのグリフィス大学附属語学学校で実施した。研修先のプログラムの内容は、約 4 週間半の語学研修と、ホームステイをしながらオーストラリアの文化を体験することである。出発前に 5 回の事前講義を行い、オーストラリアの基礎知識、現地での生活について学んだ。英語の授業はプレースメントテストの結果によって自分のレベルに

合ったクラスに入り、世界各国の学生とともに学ぶことができる。大学が提供するコアラ保護区へのフィールドトリップ等にも参加した。帰国後の 4 月に発表を行い、条件を満たすことができれば、次年度に単位が与えられる。

６．海外教育研修の受入・協力

平成 29 年度に実施したプログラムは以下の通りで、SICEP、タイ、ドイツ、韓国のプログラムが日本学生支援機構（JASSO）の留学生交流支援制度（協定受入　短期研修・研究型）に採択され（タイ・ラジャパット大学のプログラムはコンソーシアムの基幹校である京都教育大学が申請、タイ・コンケン大学のプログラムは基幹校である東京学芸大学が申請））、参加者には奨学金が付与された。

派遣元大学（国）	プログラム名	受入れ期間	参加者数（教員）
UNCW（アメリカ）・香港教育大学・オーボアカデミー（フィンランド）	School Internship and Cultural Exchange Program (SICEP)	2017/7/3-7/15	9 名
ラジャパット大学（タイ）	短期プログラム	2017/7/11	8 名（2 名）
屏東大学（台湾）	短期プログラム	2017/6/19-6/23	6 名（4 名）
コンケン大学（タイ）	日タイ交流プログラム	2017/9/3-9/9	15 名
エアランゲン・ニュルンベルク大学（ドイツ）	日独比較教育体験プログラム	2017/9/1-9/16	6 名
ソウル教育大学（韓国）	海外小学校インターンシッププログラム	2018/1/22-2/7	7 名

(1) School Internship and Cultural Exchange Program（SICEP）

海外協定校の学生を対象とした英語による短期受入プログラム「School Internship and Cultural Exchange Program（教育観察・文化体験プログラム）」を柏原キャンパスで 7 月 3 日から 15 日まで実施し、フィンランド、アメリカ、香港から 9 人の学生が参加した。同プログラムは、日本の教育を学ぶことで日本に対する理解を深め、小・中学校で母国の文化紹介を行うなどの体験を通してグローバルな視点を持つ人材を育成することを目的としている。日本語を学んだことのない学生も参加できるよう、講義はすべて英語で行われた。

プログラム期間中は、言語面でのサポートや日本文化紹介などを本学の学生が行い交流を深めた。また本学の授業にも参加し、履修している学生とディスカッションをした。

観察実習では本学附属平野小学校・中学校と柏原市立柏原東小学校を訪問した。柏原東小学校では、6 年生を対象に「私たちの国の学校紹介」と題し、各国の授業の様子、給食、休み時間の過ごし方、放課後の活動などについての授業を行った。

参加した学生は「日本の小学生は、先生からの質問に積極的に答えている」「中学生から課題解決型のプロジェクトワークに取り組んでいて素晴らしい」「児童生徒は先生と親しい関係が築けているようだ」「日本の文化、ことば、歴史、そして教育について多くのことを学べた」「大阪教育大学の学生と交流でき、いい機会になった。サポートしてもらってとても嬉しかった」と感想を述べた。

(2) 海外小学校インターンシッププログラム

本学の協定校のソウル教育大学（韓国）の学生が「海外小学校インターンシッププログラム」に参加した。日本学生支援機構（JASSO）の留学生交流支援制度（短期受入　短期研修・研究型）に採択されたもので、7 人の学生に奨学金が授与され、1 月 22 日から 2 月 7 日まで研修を受けた。

研修は、日本の小学校で 6 日間の教育実習を行うため、多くは日本語で進められた。はじめに 1 週間、柏原キャンパスで、日本語、日本文化、異文化理解、日韓関係論や教育実習といった講義を 16 時限受講し、日本の小学校を理解した後、東大阪市立長瀬北小学校、同・長瀬東刀小学校で教育実習を行った。

研究授業は、韓国文化紹介を日本語で行った。児童に対する発問の仕方や授業時間の管理など、学習指導案を準備して臨み、良好な評価を得ることができた。また、週末などを

利用して上方浮世絵館、京都や奈良などを訪れ、日本の伝統文化にも親しんだ。

研修中は、韓国に関心をもつ本学の学生たちがチューターとして常にサポートし、国際交流、異文化理解の実をあげることができた。これは、2 月 7 日に行われた成果発表会でも実習生が強調しており、非常に有意義なものとなった。また、この成果発表会には、東大阪市立長瀬北小学校校長・谷口美佐子先生も出席され、教育実習を多角的にふりかえることができた。

7. 国際会議等

第 8 回国際センターシンポジウムを主催

「第 8 回国際センターシンポジウム・グローバルシティズンシップと多文化教育」が 11 月 22 日（水）に柏原キャンパスで開催され、学生、教職員ら約 140 人が参加した。

まず、スイス・ジュネーブ大学心理学・教育学部の Abdeljalil Akkari 教授が、ヨーロッパやユネスコで提唱されている「グローバルシティズンシップ教育」について講演した。Akkari 教授は、「グローバルシティズンシップ教育を実際に行うためには、従来のシティズンシップ教育にグローバル化の視点を入れるとともに、移民やマイノリティのシティズンシップを優先課題とすべき」と提案した。

続いて、東京学芸大学の南浦涼介准教授が、学校現場で外国にルーツを持つ子どもたちがどのように受け入れられているのか日本での事例を紹介した。教室で子どもたちが協働していくなかで、外国にルーツのある子どもが積極的に学校の行事に参加するようになることで、学校が変わっていったと述べた。

最後にパネルディスカッションが行われ、学校現場で行われている具体的な実践事例を一般化することの難しさなどについて意見交換を行った。参加者からは「概念的な話から具体的な実践例へと話が進み、頭の中で整理しながら聞くことができた」「グローバルというものが、遠いものではなく身近なものと思える機会になった」などの感想が寄せられた。

８．協定校との交流

平成 29 年度は、スイスのジュネーブ大学心理・教育学部と協定を締結した。平成 27 年以来の新たな学生交流協定であり、次年度以降、交換留学の受入・派遣が可能となる。これで、本学の学生交流協定は 14 カ国・地域の 31 機関となった。

協定校等からの訪問者

大学（国）	来訪者	訪問日
グリフィス大学 （オーストラリア）	Sharon Bignell, Regional Manager for Japan and Korea Irene Austwick, Client Administration Officer	5 月 15 日
大邱韓医大学（韓国）	Buyn Kyi Nam 国際教育交流センター長他 2 名	7 月 12 日
ビシケク人文大学（キルギス）	Talasbek Mashrapov 東洋国際関係学部長	10 月 18 日
ラジャパット大学（タイ）	Nutchanart Pengsuriya 学部長他 26 名	12 月 5 日
大邱教育大学（韓国）	Prof. Yoon Joon Chae, Director of DNUE Slow Learner Model 他 14 名	1 月 29 日 ～1 月 30 日

９．広報活動等

国際センターは、国内各地の進学説明会に積極的に参加し、本学の魅力をアピールしている。その成果の一つとして、全国の日本語学校教職員からの推薦により留学生に勧めたい進学先を選ぶ「日本留学アワーズ」に、本学は 29 年度も入賞した。27 年に「西日本・国公立部門」が新設されてから 3 年連続の上位入賞である。評価された点は、「留学生の募集案内が分かりやすい」「日本語学校との連携や熱意のある教授が多い」「学生の満足度が高い」等であった。

今年度の海外での広報活動としては、NAFSA、台湾（台北）、韓国（ソウル）、ベトナム（ホーチミン）の日本留学フェアに参加した。

１０．地域連携

(1) 公開講座

平成 29 年度も公開講座「多文化共生と日本語教育－外国語として日本語を学ぶ－」を開講した。この講座は地域の日本語学習支援に関わっている方たちを対象としたもので、定員 30 名を超える申し込みがあった。日本語はどのような特徴を持つ言語か、日本語を母語としない人たちはどのように日本語を学ぶのか、どのようなことが難しいのか、国語教育と日本語教育はどのように違うのか、海外における日本語教育事情などの講義を行った。28 年度は 7 回だったが、今回は 8 回シリーズにして内容を充実させた。参加者からは、「毎日当たり前に使っている日本語についてよく分かった」「外国人学習者からの疑問に答えられるよう、もっと学びたい」等の感想が寄せられた。来年度以降も継続する予定である。

日時	講義の内容	担当者
10/7	日本語教育事情	長谷川ユリ（国際センター）
10/14	日本語について学ぼう：日本語を外国語として見る	有田節子（立命館大学）
10/21	韓国人日本語学習者が教えてくれること：対照言語学の観点から	若生正和（同志社大学）
10/28	「やさしい日本語」でのコミュニケーション	古川敦子（国際センター
11/11	国際理解と日本語教育	中山あおい（国際センター）
11/18	コミュニケーション能力向上のための教室活動	長谷川ユリ（国際センター）
11/25	海外の日本語教育事情：台湾編	城地茂（国際センター）
12/2	国語教育と日本語教育	井上博文（国語教育講座）

(2) シニア CITY カレッジの講演

大阪府から認可を受けているシニア CITY カレッジの委託を受け、国際文化について 7 月 5 日（水）に講座を実施した。太陰太陽暦（旧暦）の構造に関するもので、50 名を超すシニア CITY カレッジ受講生が参加した。中国から伝わった暦法が、日本で応用、変貌し新たな日本文化を創造したこと、従来考えられているような迷信が科学へ発展するのではなく、科学が類推解釈によって迷信へ「進歩」することを学んだ。

12 月 13 日（水）には、第２回目として、中国数理文化の日本での変遷について講座を実施した。梁上２珠梁下５珠の中国ソロバンが、梁上１珠梁下５珠の旧日本ソロバンを経て梁、上１珠梁下４珠の新日本ソロバンへと変遷した過程を文化的に平易に解説した。また、四則演算だけと思われがちなソロバンでも開平方はもちろん、三次方程式を解くことができるとの新たな知見を得て、国連・ユネスコ無形文化遺産に登録された海外文化としての中国ソロバンを見直すこととなった。こうした文化の相互理解が草の根的国際交流につながれば幸いである。

(3) 柏原市内の小学校で国際理解の授業を実施

本学の教員志望の大学院生・学部生が留学生と協働で柏原市立堅下小学校で国際理解の授業を行った。これは、28 年度に続き、29 年度も学生プロデュースとして採択された企画、「小学生の体験的な国際交流と国際理解の授業」を、堅下小学校の協力のもとで実施したものであり、日本人学生と留学生が一緒に授業づくりをすること、定期的かつ継続的に授業を行うことが特徴である。国際センターは、国際理解の授業で紹介する国の決定、留学生への依頼、協力校との連絡調整等に際し、全面的に支援を行った。6 年生を対象とした授業を計 4 回実施し、ベトナム、中国（内モンゴル自治区）、ロシア、ルーマニア、韓国、メキシコ、マラウイの学生 8 名が参加した。行事、伝統（ダンス、城）、遊び、ことばなど、幅広いテーマを取り上げたことで、児童たちが異文化を学ぶ貴重な機会を提供した。

(4) 柏原市内の小学校・高校へのベトナム人留学生派遣

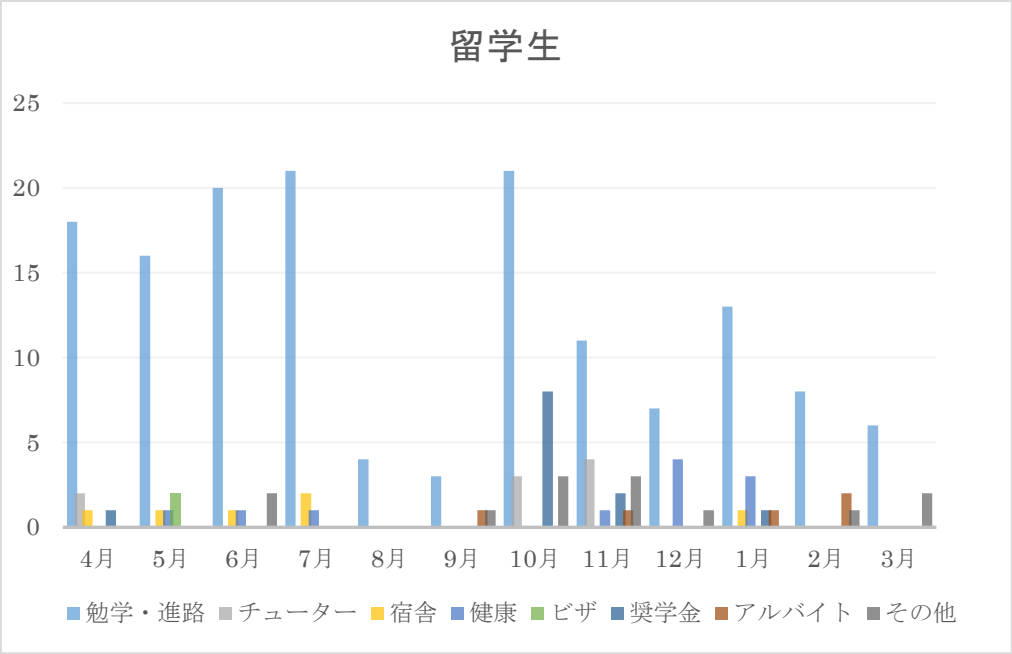
国際センターでは、柏原市教育委員会の要請を受け、市内の小学校に在籍するベトナム人児童の学習支援のため、ベトナム人留学生を派遣した。国分小学校と堅下北小学校で勉強する来日間もない児童 3 人に対し、9 月～1 月は学部生 3 名が、春休み期間中は日研生と交換留学生 3 名が支援を行った。また、大阪府立柏原東高校からの依頼により、4 月から年度末まで日研生 1 名と学部生 1 名を派遣し、ベトナム国籍の生徒の支援を行った。

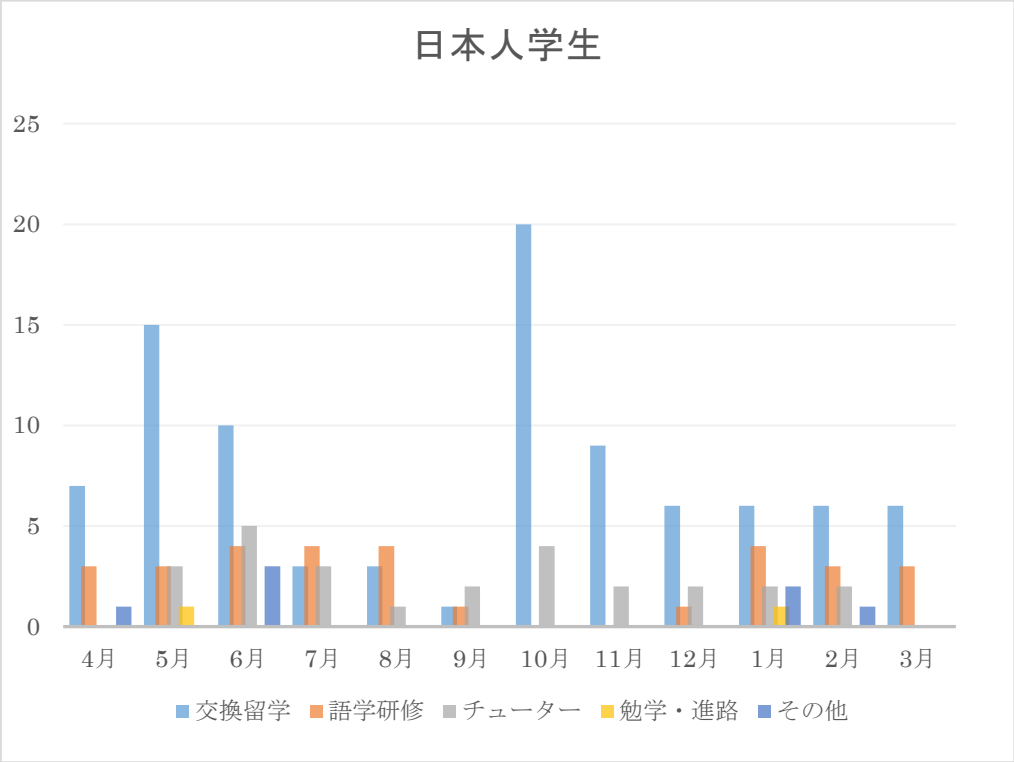
(5) その他

この他にも、本学の留学生が地域の様々な活動に参加した。

・大阪芸術大学附属幼稚園の園児との交流（4 月～7 月）
　インドの日研生 1 名
・ライオンズクエスト「ライフスキル教育プログラムワークショップ」（7/31-8/1）
　韓国、ロシア、メキシコの教研生
・香芝市のボランティアグループ「グローバル香芝」主催の「国際交流 in 香芝」（12/9）
　ベトナムの学部生 2 名、韓国の学部生 1 名
・智辯学園奈良カレッジの「人権学習講座」（1/27）
　韓国の大学院生 1 名、キルギスの交換留学生 1 名

１１．相談記録（平成 29 年 4 月～平成 30 年 2 月）





（国際センター専任教員 4 名で担当）

平成 29 年度　国際センター行事

新入生オリエンテーション・歓迎会

平成 29 年 4 月 3 日（月）・4 日（火）・6 日（木）

平成 29 年 9 月 28 日（木）・29 日（金）

平成 29 年度前期（4 月）、後期（10 月）の入学者に対するオリエンテーションを開催しました。これは新入生に対して留学生活や大学生活全般にわたって案内を行うもので、今年の新入生は右表のとおり 103 名でした。

高橋国際センター長の歓迎あいさつにはじまり、日本語の授業や図書館の利用方法、資格外活動、国民健康保険、奨学金に関すること等について説明を行いました。

4 月 26 日（水）と 10 月 25 日（水）には、指導教員や先輩留学生、日本人学生を交えた歓迎会が開催され、新入生の自己紹介、教員・先輩等の紹介を行いました。和やかな雰囲気のなか新入生の緊張もいくぶんかほぐれた様子でした。

区分	前期	後期
学 部 生	28	－
大学院生	13	－
教 研 生	8	－
日 研 生	－	11
研究留学生	－	1
特別聴講学生	9	24
研 究 生	－	6
忠南大学受入プログラム	3	－
計	61	42

春季日本文化研修－和歌山方面－

平成 29 年 6 月 17 日（土）・18 日（日）

6 月に春季日本文化研修が実施され、留学生 63 名が参加しました。今回の研修先は、和歌山県紀伊山地の熊野古道、那智の滝、そして熊野三山の熊野本宮大社と熊野那智大社です。

研修初日、かつて「蟻の熊野詣」と呼ばれるほど大勢の参拝客が往来した、熊野古道の中辺路を歩きました。私達の歩いた道中には、多くの石像や王子（神社）等が数多く点在しており、語り部の方による各地点や歴史の説明に真剣に耳を傾けながら、1 時間半かけて歩きました。その道のりは印象深く、留学生は「熊野古道で一番お勧めのルートはどれですか」「昔の人は何日かけて熊野古道を歩きましたか」「また熊野古道を歩きに来たい」等、語り部の方に多くの質問や感想を寄せていました。そして、終盤になり山道を抜けると、目の前に田畑と日置川のとても美しい風景が広がり、留学生からは驚きの声があがっていました。その後熊野本宮大社をお参りし、洞窟の温泉で有名な浦島ホテルへと船で渡りました。夜は、新鮮な海の幸をいただき、太平洋の波の音を聞きながら温泉に浸かるという貴重な体験をしました。

2 日目はまず那智の滝を訪れました。留学生たちは真っすぐに流れ落ちる滝の美しさに

感嘆し、その姿を写真に収めたり、階段を上ってより近くで滝の音や澄んだ空気を味わうなど、思い思いに過ごしていました。また、長い石段を登って辿り着いた那智大社では、樹齢850年のご神木をくぐるという日本でも珍しい体験をし、立派なお社を前にして熊野の長い歴史と風格を感じた様子でした。

今回の研修も、多くの留学生仲間や語り部の方々と交流し、古代からの日本の文化、自然の美しさに触れることのできた貴重な2日間となりました。

留学生のための七夕飾り体験を実施

平成29年7月5日（水）

7月5日（水）、シニア自然大学校の皆さまの主催により、今年度も七夕の笹飾り体験を開催していただきました。台風一過でも雲が多く、生憎の梅雨空でしたが、会場は熱気に包まれていました。

土曜日に竹の先端から刈り取った笹の葉を用意して頂き、緑の香りの中で、笹飾りを行いました。色とりどりの提灯や吹き流し、織姫と彦星といった笹飾りに加え、それぞれの想いをのせた短冊で笹を彩りながら、シニア自然大学校の皆様と交流を深めました。短冊に書いた願い事は「家内安全」といったものもありましたが、中にはハングルやフランス語で書かれ

たものも数多くありました。「（執子之手、）与子携（偕）老」（子(なんじ)の手を執りて、子と偕(とも)に老いん）といった『詩経』の一節から取った言葉も飛び出しました。
丁寧なご指導を受けながら、隣の友人達と賑やかに笹飾りを作り、日本の文化を満喫した一日でした。終了後は、恒例の記念撮影を行い、別れを惜しみました。

柏原市民に講演　－異文化の暮らしを学習しようー

平成 29 年 7 月 5 日（水）

7 月 5 日（水）、柏原市フローラルセンターで毎年実施されている講座「異文化の暮らしを学習しよう」において、本学の留学生、ン　レイ　イーさんが講師として招かれ、出身国のマレーシアについて紹介しました。レイ　イーさんは、教養学科芸術専攻美術・書道コース 2 回生です。

レイ　イーさんの話は、シンガポールが独立して現在のマレーシアが形成されるまでの歴史から始まり、地理や気候、宗教、民族、言語、料理、教育制度と多岐にわたりました。英語、マレー語、中国語（標準語）、福建語、日本語と何カ国語も話すレイ　イーさんの説明に、参加者の皆さんは日本とは異なる多民族国家、マレーシアという国への理解を深めていくことができたようです。

質疑応答の時間には、「治安はどうですか」「給料、生活費について教えてください」「年金制度はありますか」「中国系とマレー系の人々の政治的な対立はありますか」など数多くの質問が出ました。また、「マレーシアについて初めて聞くことがたくさんあり、勉強になった」「マレーシアに行きたくなった」「次回の講座も楽しみにしている」との声が寄せられ、大変好評でした。

留学フェアに参加

台湾　平成 29 年 7 月 9 日（日）
韓国　9 月 10 日（日）
ベトナム　9 月 30 日（土）

7 月～9 月にかけて、日本学生支援機構主催による「日本留学フェア」に参加しました。「日本留学フェア」は日本への留学を希望する高校生・大学生等を対象として世界各国主要都市で毎年開催されており、日本留学を希望する多くの学生に大阪教育大学をＰＲしました。本学のブースを訪れた学生からは、「寮はありますか」「奨学金はありますか」「日本留学試験の点数はどのくらい必要ですか」「留学生の就職状況はどうですか」等、入学試験や日本での生活について様々な質問がありました。また、本学で勉強したことがある元留学生も応援にかけつけ、先輩として自身の留学経験からアドバイスをしました。

≪本学ブース訪問者数≫

台湾（台北）	7 月 9 日開催 … 30 名
韓国（ソウル）	9 月 10 日開催 … 61 名
ベトナム（ホーチミン）	9 月 30 日開催 … 20 名

3 カ国 3 会場を通して計 110 名のフェア参加者が本学ブースを訪れ、熱心な眼差しで担当教員や先輩の説明に耳を傾けていました。

オープンキャンパスを開催

平成 29 年 7 月 29 日（土）・30 日（日）

今年も開催された「オープンキャンパス」で留学生向けの説明会と日本人学生向けの留学相談会を開催しました。近畿圏の日本語学校等から留学生 17 人、留学等に関心のある日本人受験者 46 人の参加がありました。本学へ進学を希望する留学生には、在籍留学生がチューターとなって、説明会の通訳補助や大学施設の案内を行い、進学相談にも応えていました。また海外の協定校へ交換留学経験のある日本人学生が、留学を志す高校生から質問をうけ、自らの留学体験を語ったり本学の留学制度などについて説明しました。

また、留学生向けの全体説明会では、本学の特色や施設、行事、留学生の支援制度についての説明が行われた後、私費外国人留学生試験等に関する受験資格や試験科目、注意事項についての説明が行われました。引き続き、先輩留学生の体験談として、陳　紹龍さん（教養学科人間科学専攻）、陳　蕊さん（大学院教育学研究科学校教育専攻）、何　雨徽さん、李　俊男さん（ともに教養学科自然研究専攻）、PHAM THI THUONG さん（教養学科健康生活科学専攻）が、それぞれ本学の良さや試験対策、就職活動等について語ってくれました。

午後に開催された交換留学や語学研修に関心のある日本人受験者向けの全体説明会では、ソウル教育大学（韓国）に留学した朴　聖希さん（大学院教育学研究科学校教育専攻）、ウェスタンカロライナ大学（アメリカ）に留学していた玉置　萌さん（教員養成課程英語教育専攻）及びリヨン第３大学（フランス）に留学していた山口　玲菜さん（教養学科健康生活科学専攻）が、留学までの道のりや実際の留学生活について語りました。彼らはチューターとしても受験生からの個別の相談質問に応じ、受験生は先輩の説明に熱心に耳を傾けていました。

平成 29 年度前期留学生修了証書授与式を挙行

平成 29 年 8 月 10 日（木）

平成 29 年度前期留学生修了証書授与式が 8 月 10 日（木）、柏原キャンパス大学会館 1 階「Dining Terra」で執り行われ、特別聴講学生 25 人、日本語・日本文化研修留学生 6 人が修了証書を授与されました。本学教職員、学生、地域の方々が見守る中、栗林澄夫学長から名前を呼ばれると、修了生代表者が壇上へ上がり、修了証書を受け取りました。

栗林学長が祝辞を述べた後、特別聴講学生の LEE LI HSIEN さん（台湾）と日本語・日本文化研修留学生の WANG YUCHEN さん（中国）が修了生を代表して、それぞれ挨拶をしました。LEE LI HSIEN さんは、「大阪教育大学での生活は、つらい思い出もあったが、すべてが良い経験となりました。友達もたくさんでき、とても充実した日々を過ごすことができました。帰国した後はそれぞれ道が分かれますが、またどこかで会えることを楽しみにしています。皆さんに心から感謝したい」と挨拶をしました。

その後、地域の国際交流団体、教員及びチューターの日本人学生等とともに交流会を行いました。交流会では、修了生全員が日本語で留学の思い出やお世話になった方々への感謝の気持ちをスピーチし、大学からは修了生に記念品が贈られました。最後には、参列者全員でアーチの花道を作って送り出すと、修了生たちは留学生活に名残を惜しみながら、会場を後にしました。

国際交流プログラムを実施

平成 29 年 10 月 25 日（水）・11 月 28 日（火）・12 月 20 日（水）

留学生と日本人学生の交流をはかり、文化の相互理解を深めるため、今年度新たに国際交流プログラムを 3 回実施しました。

このプログラムでは、留学生が本学の外国語学習支援ルームのサポーターを中心とした日本人学生と協力して企画・準備を行い、さらに当日の発表を通して相互に異文化交流を楽しみました。

第 1 回目では、キルギスからの留学生 ASANKALYEV DASTAN さんと AKMATBEKOV CHYNGYZ さん、BOLOTBEK KYZY SAIKAL さんの 3 人がキルギス共和国を「アジアのスイス」と題して発表しました。母国の基本的な情報に加え、「世界で一番物価が安い国の一つ」として、キルギスと日本の商品の値段や給料などを比較して示しました。また、伝統的な料理と有名な場所を発表し、最後に簡単なキルギス語での挨拶や自己紹介などを教えて、参加者が実際にキルギス語で会話をしました。

第 2 回目は、母国で教員をしている教員研修留学生の MKWAPATIRA YAMIKANI EMMANUEL さん（マラウイ）、JUDET SIMONA MARIA さん（ルーマニア）、GALVAN DIAZ DE LEON LUIS CARLOS さん（メキシコ）の 3 人が、「海外×教育！」をテーマに、海外ではどのような授業があるか、日本との違い・共通点等、それぞれの国の特徴や伝統的な文化・教育について発表しました。

第 3 回目は、日本語・日本文化研修留学生の VU THI THANH KIM さん（ベトナム）、SALUNKE VARSHA SAHEBRAO さん（インド）、GAVAI GRETA さん（ハンガリー）と日本人学生も加わり、それぞれ出身国の冬の過ごし方や冬の特別なイベント等、「冬」をテーマに発表を行いました。

発表者は、「母国についての理解が深まることを希望しています」「日本人や留学生は私の国について何も知らなかったと思いますが、発表後少し印象に残ったと思いました」「発表のおかげで自分たちも母国についてもっと詳しく知ることができました」と感想を述べました。

柏原市民に講演　－異文化の暮らしを学習しようー

平成 29 年 11 月 15 日（水）

11 月 15 日（水）、柏原市フローラルセンターで毎年実施されている講座「異文化の暮らしを学習しよう」において、本学の留学生ナジモワ・クリスティーナさんが講師として招かれ、出身国のロシアについて紹介しました。クリスティーナさんは、ウラジオストックの中学・高校で日本語を教えている、現職の教員です。

クリスティーナさんは、ロシアの地理や地域、民族など基本的なことについて説明したあと、有名な観光地、ロシア正教に関係のある伝統行事や人々の生活習慣についてスライドを用いて解説しました。最後に、ロシアの伝統的な踊りもビデオで紹介し、希望者をつのってステップダンスを一緒に楽しみました。

質疑応答の時間には、「一般の人々は日本に対してどのような印象を持っていますか」「働く女性はどのような仕事をしていますか」「経済状態はどうですか」「日本とロシアで物価の違いはありますか」など、数多くの質問が出て、クリスティーナさんは丁寧に一つ一つ答えていました。そして「今まで知らなかったことがたくさん分かって勉強になった」「物価、食べ物、生活など日本との違いが理解できた」「ダンスの練習も変化があって楽しかった」などの声が寄せられ、大変好評でした。

秋季日本文化研修－兵庫方面－

平成 29 年 12 月 9 日（土）

秋季日本文化研修を、11 月 26 日（土）に実施しました。本研修は、本学留学生が日本の伝統文化に触れ、より深く理解する機会を提供するとともに、日本人学生と留学生の交流を促進することを目的として、毎年の恒例行事として行っています。今年は留学生・日本人学生 79 名と引率教職員 4 名で、滋賀県を訪れました。

朝に大学をバスで出発し、まずは神戸市にある「舞子海上プロムナード」に向かいました。この施設は世界有数のつり橋である明石海峡大橋に併設された回遊式遊歩道で、海上から高さ約 47 メートルに位置し、迫力満点の眺めを楽しむことができます。また、明石海峡大橋の歴史や高い科学技術に関する資料も多数あり、プロムナードの建物外に設置されていた実物大のケーブルの部分展示ではその大きさに皆驚いていました。

次に、明石市にあるレストランへ移動し、明石焼き作りを体験しました。ずらっと並んだ専用の焼き台で学生が黙々と明石焼き作りに没頭するさまは壮観な眺めでした。一所懸命自らの手で焼き上げた明石焼きをみんなで頬張りました。

明石焼きでお腹を満たした後は、国宝・姫路城に向かいました。白鷺城ともいわれる美しい姫路城に見入る学生もいれば、姫路城内でのみプレイできる「姫路城大発見」というスマートフォンアプリをプレイしながら城内をまわる学生も多数いました。このアプリはスマートフォンの位置情報サービス機能を使い、姫路城内に多数設置された専用のマークをスマートフォンで読み取ることでスマートフォン上で動画が再生されたり、カメラ機能をとおして江戸時代の街並みを見ることができる体感型アプリです。国際センター・長谷川教授による研修の事前講義で紹介され、多くの学生たちがいつもとは一味違った方法でお城探訪を楽しみました。

時間ぎりぎりまで見学を楽しんだ学生たちは、名残を惜しみながらも大阪への帰路につきました。友人たちとともに新旧の日本文化を体験でき、学生たちにとっては充実した一日になったのではないかと思います。

留学生のための門松づくり体験

平成 29 年 12 月 13 日

12 月 13 日（水）、シニア自然大学校の皆様主催により、今年度も恒例の「門松づくり」体験を開催していただきました。日本人でも本格的な門松を作るようなことは少なくなり、留学生にとっては貴重な体験です。

参加した留学生達のために、立派な孟宗竹や南天、そしてメインとなる松などの材料が用意されました。赤い南天以外にも、白い南天も用意していただき、紅白の南天で、正月らしさを倍増させました。参加者は、シニア自然大学校の皆様のやさしく手ほどきを受けながら、立派な門松を完成させました。また、飾りとして折り紙も習い、日本の文化に触れることのできた一日でした。この日参加した留学生は 32 名、飛び入りで 2 名追加になり、シニア自然大学校の皆様は 63 名も見えられるなど、門松づくりは七夕の笹飾りとあわせて留学生に大人気の体験プログラムです。

最後に、自作の門松を手に記念撮影をしました。参加者は束の間のひとときを地域の皆様と交流し、自然に触れ合う素晴らしい機会を満喫していました。シニア自然大学校の皆様、ありがとうございました。

留学生に奨学金を授与

平成 29 年 12 月 13 日（水）

大阪教育大学留学生後援会による平成 29 年度奨学金授与式を 12 月 13 日（水）に開催し、私費外国人留学生に奨学金を授与しました。

留学生後援会は、留学生への経済的支援、地域との国際交流の促進を目的として、地域の支援団体及び本学教職員等により構成された組織で、平成 15 年度から毎年、留学生に対し奨学金を授与しています。今年度は、寄付団体名を冠した奨学金 5 人、留学生後援会奨学金 7 人、大阪柏原ロータリークラブ教育支援金 3 人の計 15 人に奨学金を授与しました。

留学生代表として挨拶した教育学部１年生　成梦雪さん（中国）は、「私は人権問題や外国人児童生徒教育に関する授業やゼミにも参加し、充実した環境で勉強できることに感謝しています。ただ、家族からの経済的な支援は無く、アルバイトで思うように大学の活動に参加できないこともあったので、奨学金をいただけることはとてもうれしいです。奨学金の重みを理解し、支援頂いた皆様のご期待に沿えるよう精一杯頑張っていきます」とお礼の言葉を述べました。

向井康比己副理事・副学長は、「奨学金授与団体である株式会社福和楽は、本学教養学科自然研究専攻の卒業生である陳鋒さんが創業し、本学の卒業生が複数名就職しています。先輩からの支援は、在校生にとって心強く、大きな励みになっています」と話しました。

留学生後援会では、今後も制度の拡充をめざし支援の輪を広げていきます。

奨学金等提供団体

- ●国際ソロプチミスト大阪－柏原
- ●大阪柏原ロータリークラブ
- ●大阪教育大学教育振興会
- ●大阪教育大学留学生後援会
- ●柏原ライオンズクラブ
- ●株式会社福和楽
- ●大阪教育大学生活協同組合

平成 29 年度国際センター運営委員会名簿

区　分	氏　名	所　属	備　考
国際センター長	高　橋　　登	学校教育講座（兼任）	委員長
国際センター専任教員	長谷川　ユ　リ	国際センター	
	城　地　　茂	国際センター	(宿舎運営)
	中　山　あおい	国際センター	(宿舎運営)
	古　川　敦　子	国際センター	(宿舎運営)
国際センター兼任教員 ＊	加　藤　可奈衛	美術教育講座	(宿舎運営)
	小　林　和　美	社会科教育講座	
	水　野　治　久	学校教育講座	
	石　橋　紀　俊	グローバル教育講座	(宿舎運営)
	井　上　直　子	グローバル教育講座	
	藤　田　　修	理数情報講座	
	松　本　マスミ	グローバル教育講座	
	辻　本　英　和	初等教育講座	
	中　田　博　保	理数情報講座	
	赤　木　登　代	グローバル教育講座	
学 長 指 名 委 員 ＊	橋　本　健　一	英語教育講座	
	松　本　勝　昌	学術連携課長	

＊任期：平成 28 年 4 月 1 日～平成 30 年 2 月 6 日

平成 29 年度留学生宿舎運営会議名簿

氏　名	所　属	備　考
中　山　あおい	国際センター（国際教育）	委員長
城　地　　茂	国際センター（国際事業）	
古　川　敦　子	国際センター（国際教育）	
加　藤　可奈衛	美術教育講座	
石　橋　紀　俊	グローバル教育講座	

任期：平成 28 年 4 月 1 日～平成 30 年 2 月 6 日

平成 29 年度国際交流委員会委員名簿

	氏　　名	備　　考
副学長	向　井　康比己	委員長
国際センター長	高　橋　　登	副委員長
国際センター　専任教員	長谷川　ユ　リ	国際教育部門
国際センター　専任教員	城　地　　茂	国際事業部門
国際センター　専任教員	中　山　あおい	国際教育部門
国際センター　専任教員	古　川　敦　子	国際教育部門
国際センター　兼任教員	水　野　治　久	
国際センター　兼任教員	松　本　マスミ	
教員養成課程＊	瀬戸口　昌　也	
教員養成課程＊	橋　本　健　一	
教育協働学科	赤　木　登　代	
教育協働学科＊	鈴　木　　剛	
教育協働学科＊	中　野　知　洋	
初等教育課程＊	裴　　光　雄	
大学院連合教職実践研究科＊	柏　木　賀津子	
学術部学術連携課長＊	松　本　勝　昌	

＊任期：平成 28 年 4 月 1 日～平成 30 年 2 月 6 日

平成 29 年度私費留学生奨学金等推薦選考会議名簿

所　属　等	氏　　名	備　　考
国際センター長	高　橋　　登	委員長　学校教育講座
国際センター（国際教育）	長谷川　ユ　リ	国際センター
	水　野　治　久	学校教育講座
	橋　本　健　一	英語教育講座

任期：平成 28 年 4 月 1 日～平成 30 年 2 月 6 日

平成 29 年度留学生推薦選考会議名簿

所　属　等	氏　　名	備　　考
国際センター長	高　橋　　登	委員長
国際センター（国際教育）	長谷川　ユ　リ	国際センター
	松　本　マスミ	グローバル教育講座
	中　野　知　洋	グローバル教育講座

＊任期：平成 28 年 4 月 1 日～平成 30 年 2 月 6 日

平成 29 年度留学生推薦選考会議語学評価委員名簿

担当言語	氏　　名	所　　属
英　　語	松　本　マスミ	グローバル教育講座
中 国 語	中　野　知　洋	グローバル教育講座
ドイツ語	赤　木　登　代	グローバル教育講座
韓 国 語	小　林　和　美	社会科教育講座
フランス語	井　上　直　子	グローバル教育講座

編集後記

２１号で、『国際センター年報』としては最後の年報になります、と告知しましたが、本号・２２号で最終号になりました。平成 31 年度は、『グローバルセンター年報』とさらに発展した年報となる予定です。年報の内容も、寄稿文を主としたものとなり、２１号で始まった電子出版も継続する予定です。

一口に電子媒体と言っても、色々ありましたし、これからも色々、新たな媒体が生まれてくることでしょう。現在では、PDF 形式が主力のようですが、将来、更なる形式が生まれることもあるかもしれません。そもそも、デジタル形式が 100 年後にもある保障すらありません。二進法が三進法とか六進法に変化している可能性もあるでしょう。当然、新たな媒体に移植するという作業は進められているのでしょうが、中断してしまうと、復元が困難になってしまうかもしれません。ただ、内容さえ優れていれば、後世の人々が、万難を排して継続してくれることでしょう。そうしたことを考えると電子媒体へと変化した『国際センター年報』ですが、『グローバルセンター年報』が、これからも絶えることなく、続いて行くことを願ってやみません。

末筆になりましたが、本誌に投稿していただいた先生方に感謝いたします。今後も、国際活動に積極的に参加していただけるようお願いいたします。

2018 年 3 月 1 日

文責・城地茂

2018 年 3 月 31 日　発行

大阪教育大学国際センター年報　第 22 号

Bulletin of Osaka Kyoiku University International Center, No. 22

編集兼発行者
大阪教育大学　グローバルセンター
〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘 4-698-1
電話：072-978-3299, 3300